第三章　アナログ政府にデジタル難民

「政府の記者会見を聞くと状況が変わっても同じことばかり言っている。まるで再放送を見ているみたい」

「そうじゃな。ところで最近一日当たりのワクチン摂取回数のこと、余り言わんのう」

テレビに棒グラフが示されると早速山本が解説を始める。

「ワクチンが手に入らなかったり異物の混入があったりして、最近は一日当たり五、六十万回ぐらいです」

「分かりやすいな。多いときは『百五十万回も接種できた』と自慢していたけれど、目標の百万回を切ると何も言わなくなった」

「そうじゃ。山本さん」

大家が厳しい視線をテレビの中の山本に向ける。

「毎日、感染者数や重症患者数や死亡者数や自宅療養者数を報道しておるが、ワクチン接種回数は報道されんのう。何故じゃ」

「鋭い！　たくさん接種ができているときは得意げなワクチン担当大臣の発表を報道するぐらいで、どこの放送局も日々のワクチン接種回数を報道しません。大家さんの言うとおり感染者

数などと一緒に国民に伝えるべきですね」
先ほどの棒グラフの表示が小さくなる。
「これが政府のホームページの画像です。小さくて非常に見にくい」
「ほんとだ。でも多い日だけはよく分かる」
「半分ごまかしじゃ。じゃが、なぜ報道せんのじゃ」
パソコンをいじっていた田中も山本に厳しい視線を向ける。
「インターネットでもヒットしない。報道管制がひかれている？」
「大いに反省します。いつの間にか、どこの放送局も似たり寄ったりの内容になっています。私たちの放送局だけは違うと思っていましたが……」

＊

「コロナ騒動の前から僕はズーと失業中ですが、大家さんのお陰で不自由なく暮らせてます」
田中が大家に深々と頭を下げる。
「ワクチンの接種もできました。でも昔の同僚たちはここへ来て大変困っています」
「と言うと」
大家が膝を乗り出すとテレビに映像が流れる。山本が長引く新型コロナウイルス感染拡大で解雇された数名の元非正規社員を取材している。
「なぜオリンピック会場に？　中には入れませんよ」

「中には入りません。大量の弁当を破棄している場所が分かったのでそこに行くのです」
こう言う横のかなり年配の男性が続ける。
「急に無観客になってボランティア用の弁当が余って大量に廃棄するという投稿があったでしょ。捨てるぐらいならわしらにくれればいいのに」
思わず山本が涙ぐむ。その年配の男性が急に倒れ込む。
「大丈夫ですか！」
先ほどの男性につられて山本もかがみ込んで心配そうに見つめる。
「弁当を手に入れようと半日かけてここまで歩いてきたのです」
この映像を見ていた大家が驚く。
「電車賃もないのか」
すると画面の中から返事がする。
「貯金も使い果たしました。ワクチン接種もできません」
不思議なことにテレビの中と外で会話が始まる。
「ワクチンは無料じゃ」
「予約ができないのです」
大家に変わって田中が尋ねる。
「スマートフォンを持っていないのか」

「いいえ、持っています」
「どういうことじゃ」
「通信代を滞納してます。だから使えないのです」
「何と！　生活保護は？」
「申請できません」
「市役所の窓口に行けばいいのじゃ」
田中が大きく首を横に振る。
「今はネット社会です。保護申請やワクチン接種……何でもかんでも予約が必要です。ましてや三密禁止社会。直接窓口に行っても相手にされません」
「何ということじゃ」
何とか破棄前の弁当を手に入れた先ほどの人たちが涙を流す映像が消えて、今度は長蛇の列の映像に変わる。
「このように先着順でワクチン接種ができる会場もありましたが、用意されたワクチンはわずか二百人分で徹夜してまで並んでいる人がいて誰でも接種できる状態ではありませんでした」
並んでいる人の殺気だった愚痴を山本がていねいに拾うと解説をする。
「明後日からネットでの応募に切り替わって抽選になりました。確かに徹夜までして並ぶ光景は異常です。だからといって何でもネットで処理するというのも問題です」

今度は以前行われた高齢者に対するワクチン接種にかかるグラフが出てくる。

「高齢者の八十パーセント以上が二回目の摂取を終えたと政府が発表していますが、もちろん希望しない人もいますが、希望する人でまだ一回も受けていない人もかなりいます」

「そうじゃろ。わしはパソコンもスマートフォンも使えんから田中さんに頼んで予約できたからいいようなものの、年寄りにネット予約は無理じゃ」

「接種したかったらなんとかするだろうという政府の対応に非難が集まりましたが、繋がるはずのない電話予約を再開して押し切りました」

「しかしじゃ、先ほどのような人たちのように電話すらできない人もいるぞ」

「そうです。ワクチン難民です。ワクチンだけではありません。あらゆる行政手続きも受けることができないデジタル難民です」

ここで田中が勢いよく割り込む。

「政府はデジタル化だといってるけれど生活困窮者や身寄りのない老人に救いの手を差し伸べない。アナログも必要なんだ。『国民に寄り添う政治』なんて言ってるけれど『気持ち』というものはアナログの典型ですよ」

「わしはデジタル化していない時代を生きてきた。確かに役所の窓口でたらい回しされたこともあったが、だんだんと窓口サービスはよくなった。やればできるんじゃと思ったぞ」

山本も食い込んでくる。

「デジタル化すれば引っ越し前後のいろいろな手続きが一回で済むと言いますが、引っ越しない人には恩恵はありません。行政がデジタル化されると毎日非常に便利になるものではありません。道に迷ったときスマホのナビではなく近くを歩いている人に尋ねる方がよっぽどわかりやすいし、その親切に感動するものです。政府が言ってることに『なるほど』感はありません」

「何でもそうじゃが『便利』とか『お得』というようなセールストークには用心すべきなのじゃ。政府はいいことばかり言っておるが、百パーセントいいものなどない。悪いことや不便なことをまったく言わないのはおかしい！」

「デジタルというものは脆弱なところがあります。みのり銀行のＡＴＭなんて毎月故障しています。大量の個人情報流出事件も毎日のように報道されます」

ここで銀行を監督する大蔵省がみのり銀行の頭取を大臣室に呼んで行政処分する映像が流れる。一回だけではない。七回も処分している。しかし、銀行の不手際は治らないし大蔵省も具体的な指導はしない。しないというよりできない。

「デジタル化が進めば政府はますます対応できなくなる。問題はデジタルを使いこなせない人は放置される。使いこなす人でも下手すれば見殺しにされる。必ずアナログのバックアップが絶対必要なんだ」

「なるほど」

大家が感心するが山本は天を仰ぐ。

「『デジタルが善』でまるで『アナログが悪』のように言ってるけれどこの二つを融合しなければならないのに、まっしぐらにデジタル化に走っている。政府だけじゃなくマスコミにも問題ありだわ」

真剣な山本に田中が笑い出す。

「何がおかしいの？」

山本が怪訝な顔をする。

「だって今の政府にデジタル化する力はない。数百人程度の精鋭のデジタル化部隊を投入しても成果が上がるのは何十年もかかると思うなあ」